

## 研究発表

### 戦 争 と 詩

——与謝野晶子から山之口獺まで——

War and Poetry:

From Yosano Akiko to Yamanoguchi Baku

Steve Rabson\*

Since the early 20th century Japanese poets have written with intensity and eloquence in opposition to war. Antiwar poetry in Japan has been composed across a broad spectrum of genres, styles, and philosophical perspectives. Poetry opposed to war in Japan, as elsewhere, tends to be highly personal in nature. Poets often describe the experience of the individual in wartime. Some write explicitly about family members, lovers, friends, and about their own experiences in poems that extract war from the depersonalizing realm of newspaper headlines and casualty figures.

During the Russo-Japanese War Ōtsuka Kusuoko and Yosano Akiko wrote about soldiers at the front. Yosano's admonition to her brother at Port Arthur in "Do Not Give Your Life" caused another poet, Ōmachi Keigetsu, to charge her with treason when the poem was first published in 1904. It has been the subject of lively controversy among literary critics ever since.

---

\* ブラウン大学助教授

After World War I poets Momota Sōji and Fukuda Masao wrote poems bitterly critical of Japan's costly military thrust into Siberia. In the 1920s poetry opposed to war in Japan was often heavily infused with the doctrine of the Proletarian Literature movement. But such works as Miyoshi Jurō's "A Letter to Shantung" and Negishi Masayoshi's highly sarcastic "For the Sake of the Nation" were less ideological in their criticism of the military and the draft.

The vast majority of writers in Japan supported the nation's war effort between 1937 and 1945. Still, controversy remains over a small number of poets, such as Yamanoguchi Baku and Kaneko Mitsuharu, whose writing of this period has been interpreted as critical of the war. With the revulsion toward war felt in Japan since 1945, poets have regularly produced antiwar poems that have been published singly and in anthologies.

反戦詩、つまり戦争反対の詩と言いますとすぐ与謝野晶子の「君死にたもうことなかれ」を思い出されるでしょう。日露戦争中の明治三十七年に発表されたこの新体詩は今までいろいろな評価と議論を起こして来ました。まずはこの詩が発表されてから一カ月にもならないうちに、大町桂月と言う評論家が次のような晶子に対する激しい罵倒を月刊誌「太陽」に載せました。

草莽の一女子義勇公に奉ずべしとのたまえる教育勅語、さては宣戦詔勅を非議す、大胆なるわざ也。……日本国民として許すべからざる悪口也、毒舌也、不敬也、危険也。……乱臣也、賊子也、国家の刑罰を加うべき罪人なり<sup>(註1)</sup>

晶子の反論はここで桂月の言った「危険」ということばをうまく利用して、

彼の考え方の中にある矛盾をはっきり示しました。

桂月様大相危険なる思想と仰せられ候へど、当節のように死ねよ死ねよと申し候こと、又なにごとにも忠君愛国などの文字や畏おほき教育勅語などを引きて論ずることの流行は、この方却て危険と申すものに候はず<sup>(註2)</sup>や。

日露戦争の当時にあつてこのような考えや詩を発表することはかなり勇気のいることだったのではないかと思います。詩の内容を見ますと、個人にとってこの戦争の意味を強く拒否し、その上、天皇陛下に対して皮肉な態度もとります。さらにその当時の状況を見ますと反戦詩どころか好戦詩や主戦論が非常に多く出版されていて、それまで幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三などの反戦的発言を載せていた毎日新聞社さえ主戦論に傾きました。一般の読者にとっては反戦論ということよりも、むしろこの詩人の勇気がひとつの魅力あるところだったことはたしかです。

しかしそれにもかかわらず、昭和初期ごろになると、この詩はまた文学の世界において激しく非難されました。その当時盛んになったプロレタリア文学関係の詩人や批評家によると、この詩における抵抗は不十分なものであり、発想が小市民的で「家をまもる」という「封建的イデオロギー」によるものにすぎないと評価されました。ある意味では、この「封建的」という批判のことばと大町桂月の言った「乱臣」という批判のことばは似ている所があつて、両方とも晶子の詩そのものよりも作者の思想を評価しているようです。

それから第二次大戦後になるとまたこの詩の思想は改めて注目されることになり、逆に一躍たいへん人気ある作品になったのです。戦後の反戦詩というものがひとつの流行になったような状況の中でどの日本近代詩集にもこの作品はかならず含まれるようになりました。それから当時の反戦デモに参加する学生たちにとってはこの詩はひとつの「聖歌」のようなものであつたということです。

さて、こうして右からも左からも非難されたり、賞賛されたりしてきたわ

けですが、この詩はなぜ日本ではいつも代表的な反戦詩として評価されているのでしょうか。私は二つの理由があると思います。まずひとつはこの作品の中にある強烈な個人的な焦点であります。戦争は新聞などに報じられるものとして人々の前にあらわれますが、たいていそこではその兵力と「勝負」と死傷者の数しか報じられていません。しかしある種の文章、特に文学作品においては戦争がこの非人間的なマスコミュニケーションの領域から取り出されて、ひとりの人間の経験として描かれています。その「ひとりの人間」は戦場でたたかっている兵隊に限りません。戦争はいろいろの人に否応なしに影響を及ぼすからです。作者がひとりの人間の経験に集中すると、それによって読者はそのひとりの立場に自分を立たせることができる。「君死にたもうことなかれ」の場合では詩人は内地で待っている兵隊の姉の苦しい立場から情熱的に詩を書いているので、読者はたいへん切実にこの姉の立場を感じることができるのです。

この作品が代表的な反戦詩と評価されているもうひとつの理由はその中に含まれている怒りであります。ふだんは圧倒的に強力な政府の行為、特に戦争に対しては、ひとりの人間は非常に弱いものと見られています。しかし、文学的な表現によってその「弱いひとり」でも政府とある面に対決できるかもしれない。極端な場合にはその文学の表現は大勢の読者を怒らせて、政府の強権に対する実際の対決を起こさせるような、いわゆる “The pen is mightier than the sword” の状態になる場合さえあります。その可能性を支配者たちやその支持者も敏感に意識して恐れているから文学作品に対する検閲が行なわれるのです。与謝野晶子の場合は政府に対決するためにこの詩を書いたとまでは言えないだろうと思います。けれどもこの作品の中にはかなり鋭い感情がこめられていると思われます。まず、自分のおとうとのいのちを考える晶子は皇軍の一番大事とされている目標地点の旅順の城について「ほろぶとも、ほろびずととも何事ぞ」と強く政府の主張している戦争の方針を拒否しています。それから明治天皇についてもやや諷刺的な口調で「す



めらみことは、戦いにおおみずからは出<sup>い</sup>でまさね」と言っているのです。この詩にこめられた強い個人的な怒りと戦争に対する否定的な姿勢はたいへんよく目立つ物で大町桂月もすぐ気になっただろうと想像できます。

しかし、反戦詩や厭戦詩と言うのはいつも怒りや皮肉のある作品とは限りません。同じ日露戦争中に発表された大塚楠緒子の「お百度<sup>もうで</sup>詣」の場合も個人的な立場から戦争に対してしめされた疑問なのですが、この詩の口調はとてもあわれみぶかくて、柔らかです。(資料1)

資料1 お百度詣

大塚楠緒子

ひとあし踏みて 夫<sup>つま</sup>思い  
ふたあし国を思えども  
三足ふたび夫おもう  
女心<sup>とがめ</sup>に咎<sup>とが</sup>ありや  
朝日に匂う日の本の  
国は世界に只一つ  
妻と呼ばれて契<sup>ちぎ</sup>りてし  
人はこの世に只一人  
かくて御国<sup>わが国</sup>と我夫と  
いずれ重きととわれなば  
ただ答えずに泣かんのみ  
お百度もうでああ咎<sup>とが</sup>ありや

明治三十八年一月に発表されたこの新体詩はその四カ月前に発表された「君死にたもうことなかれ」と同様に自分の愛している人が戦争の犠牲にならないようにと願っているのですけれども、楠緒子の場合、その願いは晶子の積極的な表現とは違って、真剣な祈りであります。戦争文学評論家の竹長吉正によると、その表白の仕方の異っているのはふたりの属していた、それぞれの文壇流派からの影響が関係すると述べています。つまり、晶子は「明星」派の歌人にふさわしい情熱的な表現で自分の考えを直接的に書いているが、楠緒子は竹柏園門下に属し、もっと平淡で穏健な作風をしている人であったそうです。ここに<sup>(注3)</sup>にはたしかにふたりの詩人的な資質の違いがあると思わ

れます。

しかし「お百度詣」よりも半年前に発表された楠緒子の詩「進撃の歌<sup>(註4)</sup>」は反戦どころか激しい調子の好戦的な詩であって、まったく別人の作品と見えるようなものです。(資料2)

## 資料2 進軍の歌

(前略)

進めや進め一齊に	一步も退くな身の耻ぞ
前に名譽の戦死あり	後に故国の義憤あり
思へ我等が忠勇は	我等が親の續にて
我等が妻の誇にて	我等が子等の誉ぞや
何に恐るる事がある	何に臆する事がある
日本男子ぞ嗚呼我は	日本男子ぞ嗚呼我は

(後略)

この詩の猛烈な刺激性を考えますと、半年あとの「お百度詣」の口調がある面で解釈できると思われます。「君死にたもうことなかれ」の戦争の強い拒否に比較すれば楠緒子は戦争に対して当惑の態度を見せます。つまり当時の日本の女性が「国を思えども」その胸に秘めている熱情の祈願を弁明します。

しかし詩の口調の解釈は別としても、「お百度詣」にあらわれる「女心」と「進撃の歌」で主人の死に対して歌われる「妻の誇」とは驚くほど根本的に異っています。この楠緒子のふたつの詩の六カ月の間の改変については、晶子の詩の影響があったのだとよく説明されますが<sup>(註5)</sup>、日本においては詩人が同じ戦争について反戦的な詩も好戦的な詩も両方書くことはけっして珍しくありません。

日露戦争から十三年後のシベリヤ出兵についての詩は比較的少ないけれども、福田正夫の初期の作品「一つの列車とハンケチ」はそのひとつです。

岡本潤はこれを「巧みな詩といえないが、真情を吐露した作品だ<sup>(註6)</sup>」と言っています。私はこの批評に反論はしませんが、その最初の節に描かれた光景はかなり巧みで、印象的だと思います。(資料3)

一つの列車が、  
わっと魂<sup>たま</sup>ぎる様に万歳をわめきながら、  
西伯利亞<sup>シベリア</sup>出兵の兵士をのせて、  
通過して行く瞬間——  
窓から争う様にふるハンケチ、  
沿道の人々は呆然として見送る、  
一人の老いた車夫だけが、  
万歳と叫んだ、帽をふった。

同じ大正時代に発表された百田宗治の「翼を失った天使の物語」と千家元麿の「この話をきいて」、それから白鳥省吾の「海上の憂鬱」と「殺戮の殿堂」はいずれも一般的な反戦詩と見られていますが、特にひとつの戦争について書かれた作品ではありません。ところが、太平洋戦争の時期に入ると福田、百田、千家、白鳥、さらに与謝野晶子さえも、いろいろの理由で好戦的な詩を発表しました。しかしそうした中で、片山敏彦と三好十郎の場合は太平洋戦争に対しても非協力的だったと言われています。彼らは昭和二年と三年に行なわれた山東出兵に対する批判的な詩を書きました。昭和二年に作られた片山の「支那の兄弟達よ…」は中国人の苦しさに同情している日本の知識人の立場から書かれています。

三好の「山東へやった手紙」は子供の立場から作られていて、そこには幼い者の素朴な気持があふれています。

この詩と多少似たところがある金井新作の「戦争」は召集された若者ともうひとりの男の問答の形で作られていますが、多くのことばを伏字にされて辛うじて発表されました。

日中戦争が勃発する昭和十二年七月から国内の弾圧、特に出版検閲、がますます厳格になって行きます。当時設立された「内閣情報部」のいわゆる「言論の指導」によって、反戦や反軍意見を発表する事は具体的に禁止されました。この政策にしたがって、当時の内務省は昭和十三年一月号の「文学界」

に発表を予定されていた石川淳の短篇小説「マルスの歌」のためにこの雑誌の一月号を発行禁止処分にしました。「マルスの歌」の中には「ある国」の軍歌のうるささとカーキ色の陰気さが批判的に描かれています。この事で石川自身、それから「文学界」の編集者河上徹太郎は一時警察に逮捕されて、罰金を取られました。その二カ月後の「中央公論」三月号にあらわれた石川達三の「生きている兵隊」も禁止されて、著者と編集者は逮捕されて、執行猶予の判決を受けました。その時の起訴状によると、この作品は「皇軍兵士の非戦闘員殺戮、掠奪、軍紀弛緩の状況を記述した」ものとされています。この二つの有名な事件にかぎらず、昭和十二年から十六年までに約一万件もの記事がさまざまな理由で禁止されました。

しかし、日中戦時下の検閲政策はまだ完全なものではなかったと言えます。たしかによく知られているプロレタリアや文学関係の小説家や詩人達の作品はきびしく検査されたようですが、この頃、まだあまり知られていない、左派にも右派にも直接関係のないような詩人は、戦争や軍隊に対する批判的なものを含んだ詩を発表することがかならずしも不可能ではありませんでした。このような作品はもちろんわずかでしたが、例えば、金子光晴の「泡」と山之口獺の「紙の上」はその二つの例になるでしょう。

資料4 泡 金子光晴

(前略)

うらがなしいあさがたのガスのなかから、  
軍艦どものいん気な筒ぐちが、  
「支那」のよこはらをぞっとみる。  
ときをり、けんたうはづれな砲弾が、  
濁水のあっち、こっちに、  
ぼっこり、ぼっこりと穴をあけた。  
その不吉な笑窪を、おいらはさがしてゐた。

(後略)

戦争が起きあがると  
飛び立つ鳥のように  
日の丸の<sup>つばさ</sup>翅をおしひろげそこからみんな飛び立った  
一匹の詩人が紙の上にいる  
群れ飛ぶ日の丸を見あげては  
だだ だだと叫んでいる  
発育不全の短い足 へこんだ腹 持ち上らない  
でっかい頭  
さえずる兵器の群をながめては  
だだ  
だだ と叫んでいる  
(後略)

金子は昭和三年まで三冊の詩集を出しましたが、いずれもあまり売れなかったもので、文学で生活しようと考えていた彼は経済的に困難な状態に陥りました。そうして昭和四年には何とか働きながら、中国、東南アジアを通じてヨーロッパまで約四年間の長途の旅に立ちました。金子の自叙伝によると昭和七年五月に帰国した時には母国の「息苦しい…空気」やまた左翼文学者に対する抑圧などが彼を驚かせたそうです<sup>(註7)</sup>。それで、彼はつぎつぎに批判的な詩を書きました。また先程言いましたように、当時あまり名前を知られていなかった彼はそれを「文芸」や「中央公論」などの雑誌にのせることができました。

しかし金子にとっても、これは完全に無事な行動ではありませんでした。昭和十年の「太鼓」十一月号にのせた「蚊」という詩について、金子は内務省警保局から注意をうけ、また「太鼓」の編集責任者壺井繁治は警察によられて訊問されました。内務省の意見では、皇軍兵士を蚊に比較するような作品は「非常時をわきまえぬ」ものだ判断されたのです。

しかし、この事件のあとでも金子はさらに批判的な詩の発表をつづけて、昭和十二年八月に出版された詩集「鯨」の中には「泡」が含まれていました。ここで「泡」に注目してみましょう。この詩の第一と第二連は Yong tzu

Chiang 楊子江の船にのっている傍観者の立場から書かれています。まず Yang tzu のあたりの、戦時下の情景が描かれているのです

つぎの第三連は実際の戦闘のみぐるしい様子を描いています。わけもわからず戦いにかり出され、戦いによってたおれた名もない人間達のありさまを見て、彼らの無残な死をつきはなして見つめています。ここにはブラック・ヒューモアと言ってもよいものもあります。

さらに、金子はこれらの戦死した人たちの声も代弁しています。しかしそれはある意味でこっけいでもあり、残酷でもある人間凝視によってつらぬかれています。

ここには人間の立場から見つめられたあからさまな生と死、そして戦争があります。「それは、のろいでもなかった。うったえでもなかった。」ただし、それは単なる戦争批判という立場よりも深く、広いものです。

この詩を発表した時、文芸評論家青野季吉は「毎日新聞」の時評でつぎのように述べました。

「事変このかたのジャーナリズムの支那論や現地通信はほとんど現象的、擦過的だが、時には荒唐無稽なものもあるが、金子光晴の「泡」は戦争の支那<sup>(註8)</sup>というものの実体をじかに感じさせる」。

山之口獏は、金子光晴と同様に、昭和十二年ごろ一般的にはそんなによくは知られていない詩人でした。沖縄県那覇市に生まれ育ち、大正十一年に上京した山之口は金子よりもずっと長い間貧しい、いわゆる放浪生活をして、暖房屋、ダルマ船の乗組員、さらには汲取屋やニキビ、ソバカスの薬の通信販売などの職を転転としたのです。山之口はこのような生活についてよく詩を書いたので、自分のその経験を詩の材料に利用する事は山之口自身が「貧乏を売る」と名付けました。

山之口獏の詩には特異な味わいのある反語的なユーモアが漂っていますが、同時にまた、そこには現代社会に対するかなり鋭い批判も感じられます。たとえば、昭和三十三年に出版された「十二月のある夜」はひとりの詩人とホ

テルの女主人のこっけいな会話にもとづいて書かれた詩ですが、その裏で一般に通用しているお金に執着しないと言う詩人のイメージに反ばくしています。

山之口は「諷刺詩人」とよく言われていますが、彼の作品の中で戦前の朝鮮と中国から日本に入って来た人々、あるいは又、沖縄から本土へやって来た人々についての詩を読むと、その境遇のつらさや問題点がつよく感じられます。

山之口はアナキストやプロレタリア文学者のような思想的な文学者達とは異なり、戦争中には当時の政府にとっては大して気になる存在ではなかったと考えられます。彼が金子光晴と同じように日中戦争下においても他のプロレタリア文学者達よりも自由に書ける立場にいた事は、そうした理由によるものだろうと思われます。昭和十五年に発表された山之口の「詩人、国民登録所にあらわる」と言う作品にはその年の新しい国家総動員法によって役所で行なわれていた転職した人々に対するこまごまとした調査が描かれています。その中で山之口は次のように書いています。(資料6)

資料6 詩人、国民登録書にあらわる

山之口 獏

ここはまるで渚のように終日人波の押し寄せている所である。波は、時勢のかおりを高く振り乱して、そこらの町工場や彼方此方の工場地帯から日々この窓口に打ち寄せて来るのである。

みんな手に手に登録手帖を持っていて、「就業の場所」や「職業」や「居住の場所」や「出征」等に関する異動申告の手続を受けに寄せてくる

この作品が発表されたちょうど1年前の昭和十四年の六月に山之口の詩「紙の上」は「改造」に発表されました。この詩には当時の一般の民衆、それから知識人や作家の日中戦争に対する態度が批判的に描かれていると考えられます。そのうえ、当時の状況の中での自分の意見の言いにくさというものもうまく感じさせてくれます。(資料5)

「紙の上」が発表された二年後に太平洋戦争期にはいると国内の言論弾圧、

特に出版検閲がまた急激に強められるようになったのです。戦争への協力を求めた当時の政府はまた左翼の文学者を逮捕したり、戦争支持目的の作家の協会を作ったり、一部の詩人や小説家達を中国や東南アジアの戦場や後方へ送ったりしましたが、この時期に好戦的な文学が圧倒的に多く創作されたのは日中戦争とくらべて、太平洋戦争が日本にとって正義でありやむをえない戦争だと信じた作家が多かったということも原因として指摘できるだろうと思われます。<sup>(註9)</sup>先程申し上げましたように、前の日露戦争やシベリヤ、山東出兵を非難した詩人でも昭和十六年から二十年の間に激しい戦争奨励的な作品を発表しました。その例としては白鳥省吾の「軍神の家」、千家元麿の「ハワイ湾の九勇士」、福田正夫の「うつべし彼ら」、それから十七年一月号の「短歌研究」にのせられた次の与謝野晶子の歌があります。

「強きかな 天を恐れず 地に恥じぬ 戦をすなる ますらたけをは」

この時期の出版物の中に私はいくら捜しても積極的な反戦詩はまだ一篇もみつけておりません。しかし、戦争支持の目的で出された詩集の中にもたま

資料7 応召

山之口 貌

こんな夜更けに  
誰が来て  
のつくするのかと思ったが  
これはいかにも  
この世の姿  
すっかり柿色になりすまして  
すぐ立たねばならぬという  
すぐ立たねばならぬという  
この世の姿の  
柿色である  
おもえばそれはあたふたと  
いつもの衣を脱ぎ棄てたか  
あの世みたいになおっていた  
お寺の人とは  
見えないよ。



に戦争とまったく関係のない詩、それから戦争に対する奇妙な態度を見せる詩があらわれます。たとえば、昭和十八年の「国民詩選」の中に山之口獺はこの「応召」と言う詩をのせました。(資料7)

この詩の人物、つまり徴兵されたお坊さんのあわただしさ、それから「この世の姿すっかり柿色」と言う表現などを考えると石川淳の昭和十三年に発禁とされた「マルスの歌」と似ている所があるように思われます。

ただ、「応召」の口調はもうすこし軽く感じられて、抵抗するといった調子はありません。しかし、それでも、この詩が昭和十八年に禁止されなかったのは私には不思議だと思われます。

そして、とうとう戦後にはいますが、検閲はまだつづいています。所が、今度はアメリカ占領軍によっていわゆる「反民主主義」の名目で、その戦争中の好戦詩を含めて、古典から現代までのいくつもの文学作品が発行禁止になったのです。そして、戦争に対する強いうんざりした気分がわきあがったので、反戦詩の流行とも言える状態が生まれました。

さて、以上のように日露戦争から今日までの、戦争について書かれた多くの詩のごく一部をざっと振り返ってみたわけです。それらの多くの作品をまとめるような適当な結論といったものはすぐには思い浮びませんが、注意しなければならない点が二つあると思います。まず一つは、私達読者は、戦争に対する詩人の態度や考えを追求しようとするあまり、その詩の思想をむりに一つの型にはめて読もうとしたり、あるいは政治的に解釈しすぎたりすることは、さげなければいけないということです。

なぜなら、どの国の文学においてもそうだと言えるでしょうが、それらの中には、はっきりと「反戦詩」あるいは「好戦詩」と言える作品もありますが、また、そこにはどちらにも分類できないような作品、戦争について、単なる賛成・反対といった態度表明におわらない、より深い、又微妙な人間感情をもり込んだ作品も多く見出されるからです。詩はその奥行きや広がりにおいて読まれねばなりません。

それから、もう一つ注意すべき事は、「戦争」であっても「労働者問題」であっても「女性解放」であっても同様ですが、このようなある特別な問題やテーマに沿って、多くの詩を集めようとする、ともすれば、収集されたデータの山の山の中で、それらの一つ一つが持っているはずの個性、詩としての文学的価値がどこか途中で見落されてしまう危険があるということです。詩はあくまで詩として読まれねばなりません。

今後の研究を続ける上で、私は、この二つの事を忘れないようにして行きたいと思います。

#### 注

- (1) 「太陽」・明治37年10月号
- (2) 「明星」・明治38年1月号
- (3)(5) 竹長吉正・「日本近代戦争文学史」・笠間選書・昭和51年
- (4) 「太陽」・明治37年6月号
- (6) 秋山清・伊藤信吉・岡本潤編・日本反戦詩集・太平出版社・昭和54年
- (7) 金子光晴・「詩人」・平凡社・昭和32年
- (8) 金子光晴・「全集」・昭森社・昭和49年に引用された。
- (9) Donald Keene. "Japanese Writers and the Greater East Asia War". *Journal of Asian Studies*, February, 1964
- (10) この研究は、国際交流基金のご協力による
- (11) 金子光晴の詩については南山大学の細谷博氏からお力添えを受けました。

(資料として、引用された各詩が示されたが、紙数の関係で発表中朗読した部分のみ掲げ、他は略す。)

#### 討議要旨

西勝氏から、与謝野晶子も、個人的関係では、菊水会の田中千秋などと親しかったり、国粹的な人達に傾倒していた面もあるので、もしかしたら、国粹的な詩を作るといふ他の面があったとしても不思議はない気もするが、そのような詩はないか、また、同じ反戦といっても明治の日露戦争の頃と第二次大戦の時の山の口貌では、反戦や国家意識の内容が違うのではないかと

質問があり、発表者から、自分はまだ資料を集めつつある段階だが、集めたものの中にはそのような詩はない。また、反戦ということでは広すぎるので、一人一人の詩人の戦争に対する態度をそれぞれ考えなくてはならない。と回答があり、さらに細谷博氏から、与謝野鉄幹は日清戦争当時は好戦的な詩を書いていた。しかしその後はそれと違った傾向の詩を書いているという研究があるので、それが関係しているかも知れないとコメントがあった。